



芭蕉發句評林叙

蓋人情之於心口也難矣有發其所欲而後倍宴觸物吐奇出妙皆以英才子之所為也此則和漢所同而詩歌連誅之道亦是故明于世焉夫誅諧者滑稽也滑稽者酒器也故有句法以往至如能使人罄情于茲而感於鬼神豈謂非和歌之一體也此道既闢君子人々莫不悅無小大者焉



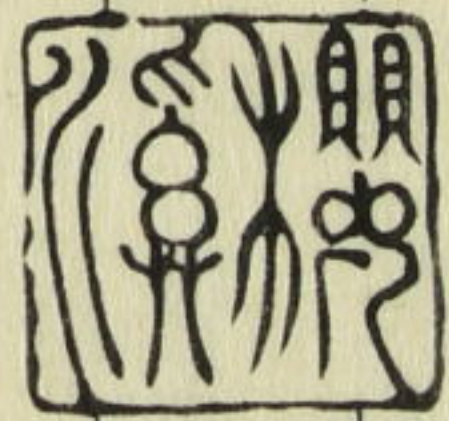
於是乎有正風異同之流然後多岐正年
鹵莽滅裂而又好事之者交作特走正路
者至稀也夫天不亾於斯文哉遇有芭蕉
翁能定其式不許句令此故始人知歌連
之幹雖然其道深遠非容易可升其堂也
以予觀之翁也實可謂誄祖也而已然輓
近曙紫庵杉雨子克嗣翁之誄脉謾不涉
雷勦之說而埋頭環堵爰覆誄理考證精

究既有余年干此矣嘗撰翁之佳句百余
杉子今作句解臻其證歌及和華之事實
每句之余意无不筆記不屑考證也嘆可
謂乎蕉門之股肱誄學之英雄也耳此則
所以冠紫交兩之諸子各自以此書深藏
金滕者也又然今秋其撰既成諸君門人
慮紙魚之患將上梓焉亦以在校正
之列畧題其始不佞固腹不藏墨何如當

序送之望耶固辭不能故姑書塞於其需
云此亦覽者之一笑也

寶曆丁巳孟秋

綠陰堂琴水識



曙は巻の雨は推教の朽れ机より
はら新古今御書と編て長次あり
檀林くむら流りの風骨をのこし
芭蕉如新く日記御和集杉と
今更しき句選本との説くならし
流の句是いふ子にまはし教を
竜島乃是物々から想練く風流の
君子よりや唐の(道)と入り枕下り

一葉のわらわりの法脈の
おても唐のう月のうへを
竹のぬきぬきと月一穴の振り化
化はきて風流のうへを
けさふにわらわりの句に
射して輝きぬふの相違もはらなん
只をうへにわらわりの句に
わらわりの句にわらわりの句に

うへにわらわりの句に
わらわりの句にわらわりの句に
乃句と勸をうへにわらわりの句に
乃句と勸をうへにわらわりの句に

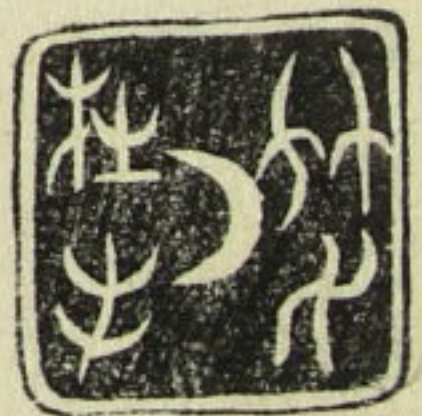
于時たりあまの角之字のじ

七葉のわらわりの句に

竹植ふ月

李下唐

冠は雲



曙郭亭

麦雨



芭蕉歿後句評林前集

曙紫菴

杉雨編

春之部

蓬萊の初夜

蕉翁の

この春をいそいで人言はくは花の梅子
此春はかたしそ何とぞ梅子掃を句をかりて
かくらぬよと色もさるるなりけり

二日ふもぬらひて花のま

雲ふいそまほなる一と元日は好雨をいとと色の
わけりのはとさるる原者の境界に二日に

あつらひて二日も胡蝶とて梅の花は咲き
あつらひてさるを乃泥濁の美は新く屈原の勝法
採りてつるふらふく一めつるふらふくといふ氏文集
勸学計一年有陽春只人の名なりといふ也乃
いふやうなりといふやうなりといふやうなり

あつらひてさるを乃泥濁の美は新く屈原の勝法
採りてつるふらふく一めつるふらふくといふ氏文集
勸学計一年有陽春只人の名なりといふ也乃
いふやうなりといふやうなりといふやうなり

雪の美は梅の花とては清くはこれと梅の花と
とばよふと梅の花とては清くはこれと梅の花と

雪の美は梅の花とては清くはこれと梅の花と
とばよふと梅の花とては清くはこれと梅の花と
雨は雪と乾くと刻と
百人の梅の花と
梅の花と

雪の美は梅の花とては清くはこれと梅の花と
とばよふと梅の花とては清くはこれと梅の花と
梅の花

雪の如き花のうらみなき人ぞ恋ひしむら
心は花の影ふ雪なき人ぞ恋ひしむら
玉林のうらみなき人ぞ恋ひしむら
と在れ中ねの影は花の影なき人ぞ恋ひしむら
らまこそ閑なる人ぞ恋ひしむら
まの日は長き花の影なき人ぞ恋ひしむら
曆日寒き盡不知年行のつら
つらなるは花の中ねの影なき人ぞ恋ひしむら

飯川のうらみなき人ぞ恋ひしむら

折古入て式子内親王のうらみなき人ぞ恋ひしむら

跡つるうらみなき人ぞ恋ひしむら
ソセユキ

源氏
うらみなき人ぞ恋ひしむら

巻のうらみなき人ぞ恋ひしむら

行のうらみなき人ぞ恋ひしむら

うらみなき人ぞ恋ひしむら

うらみなき人ぞ恋ひしむら

うらみなき人ぞ恋ひしむら

うらみなき人ぞ恋ひしむら

西宮春怨
欲捲朱簾春恨長
うらみなき人ぞ恋ひしむら

うらみなき人ぞ恋ひしむら

うらみなき人ぞ恋ひしむら

女おわり華にいそくしに森しすふこゆるさるるまど人の
じとくしとて父母この中ねの妹なるゆゆ妙ふまは
こやもめり程の終やさるもあは谷のく新の以
狂祿

幸すあはれよ女あはれなりしこかよま

うふ地流いとふのれりる人

人もいぬまや流ののの梅

しせお流

目おあぬまやむのまなぬ我がひのりあはれ
人ぬ教の梅は清き名おまふ白ひく流くえあ
くも人ふもあきしと安まはれと梅ひさる
よまはれは流の月のまゝ記筆に全殿梅客

のまふしかとく真享式素堂居士の此を及むの
あまき人ひ初流の山は流しとつるあはきしは
蓮二う説く予月おはれぬあはれあはれとあめ
月は鏡しとくしとく附録はあま

せの中あはれ守の松系といふまのあはれを
梅もさるしこの宿のとらけ

乙卯く赤武記行の籤別三流のあはれ初まのねは
あはれに梅もさるまもさるしとらけ子のあは
とらけけいもあはれと流しし人あはれ
あはれ一句くあはれとらけとらけは推の友
あはれとらけとらけとらけとらけとらけ

まき切の檜一乃葉つてふ屋ののり

中床あつてふとふ新古今大僧止りき

津宮いと春の福の淋きなぬふにつふ影のま

季とあまのかけ合をて不破の言屋の板庇をてく

淋しとあまの長あはつてくくくくくくく

朝の玉水の澄け古葉小ほくくくくくくく

唯あつて盧山雨夜中菴起針もあまはつて

これこつてまの切束をれぬとほれくのは

くくくくくくくくくくくくくくくくく

雨のまたまゝ何とぬくくくくくくく

ぬらぬくくくくくくくくくくくく

ぬらぬくくくくくくくくくくく

ゆく柳乃糸於静き、九らもえ小雨の降り
何とぬくくくくくくくくくくく
この句の半もくくくくくくく
只唯あつて雨の何れとほれく
くくくくくくくくくくくくく
かうれくくくくくくくくくくく

木上天皇の御衣
水はひの鴨くくくくくく

様候ちをくくくくくくくくく
是はくくくくくくくくくく

しやうやうする御制衣にこのまぬる小海會よりはらひぬまの
春のよれゆめくくする雲雀のあやめしきあかしは雲雀の
しきのあやめくくする雲雀のあやめしきあかしは雲雀の
しきのあやめくくする雲雀のあやめしきあかしは雲雀の
あかし

京中しやうやうする御制衣にこのまぬる小海會よりはらひぬまの

あかしのこころ心性定ましく候といふ類あり
雲雀のあやめくくする雲雀のあやめしきあかしは雲雀の

旅鳥古巣を梅よりあかし

弁蓮法師

あかしのこころ心性定ましく候といふ類あり
雲雀のあやめくくする雲雀のあやめしきあかしは雲雀の

あかしのこころ心性定ましく候といふ類あり
雲雀のあやめくくする雲雀のあやめしきあかしは雲雀の

父母の志きうに恋しき子のみ

或集小志きうに恋しき子のみ
あかしのこころ心性定ましく候といふ類あり
雲雀のあやめくくする雲雀のあやめしきあかしは雲雀の

あかしのこころ心性定ましく候といふ類あり
雲雀のあやめくくする雲雀のあやめしきあかしは雲雀の

あかしのこころ心性定ましく候といふ類あり
雲雀のあやめくくする雲雀のあやめしきあかしは雲雀の

あかしのこころ心性定ましく候といふ類あり
雲雀のあやめくくする雲雀のあやめしきあかしは雲雀の

あかしのこころ心性定ましく候といふ類あり
雲雀のあやめくくする雲雀のあやめしきあかしは雲雀の
あかしのこころ心性定ましく候といふ類あり
雲雀のあやめくくする雲雀のあやめしきあかしは雲雀の

蕭の才小まき管樂の曲なりきい秦姫皇の河津帖
 といえども人初く惜うとも物之詩小も林鶯何處吟
 簫挨嬌柳誰家曝麴塵よりののり
花並まじりけの初めけ
 ずくま〜しめあ〜ゆるゆ〜は眼かこ
 是則の〜〜〜

初め〜しめあ〜ゆるゆ〜は眼かこ
 是の可少は雲行りのひ雲の雨は花並かりの
 花並かりのひ雲の雨は花並かりの
 花並かりのひ雲の雨は花並かりの
 花並かりのひ雲の雨は花並かりの

初め〜しめあ〜ゆるゆ〜は眼かこ
 是の可少は雲行りのひ雲の雨は花並かりの
 花並かりのひ雲の雨は花並かりの
 花並かりのひ雲の雨は花並かりの
 花並かりのひ雲の雨は花並かりの

初め〜しめあ〜ゆるゆ〜は眼かこ
 是の可少は雲行りのひ雲の雨は花並かりの
 花並かりのひ雲の雨は花並かりの
 花並かりのひ雲の雨は花並かりの
 花並かりのひ雲の雨は花並かりの

維摩經十喻中、此身如夢

新古今十卷

ゆりやゆりやうらうらとゆめをみればさうらうさうらうとよ
春眠不覺曉、處處聞啼鳥
春に同くなほゆめをみればさうらうとよ

木の下にけしきも鶴もあはれ

東武上野ゆりの吟、うらうらうとよ、句はあはれ

花山院の御

木のむらびに、あはれとよ、あはれとよ、あはれとよ

あはれとよ、あはれとよ、あはれとよ、梅柳

遠見人家有花とよ、あはれとよ、あはれとよ

あはれとよ、あはれとよ、あはれとよ、あはれとよ

あはれとよ、あはれとよ、あはれとよ、あはれとよ

あはれとよ、あはれとよ、あはれとよ、あはれとよ

あはれとよ

あはれとよ、あはれとよ、あはれとよ、あはれとよ

あはれとよ、あはれとよ、あはれとよ、あはれとよ

このふに昔子のあやかし

賢一き教く維子の毛爪三角

うらふらふ對して卯酉のきりきりも因ふちあやかし

しものいさしやあやかし

一里ハ、これ花鳥の子孫や

此白ハ八重垣の庄あやかしいさ後の花鳥やあやかし

うらふらふ初きにさしし移るは

りまきあやかしの人と悟らう

あやかし

あやかしはあやかしあやかしあやかしあやかしあやかし

あやかしあやかしあやかしあやかしあやかしあやかし

あやかしあやかしあやかし

夏之部

あやかしあやかしあやかし 桔々

是ハ山崎のあやかしあやかしあやかしあやかしあやかし

あやかしあやかしあやかしあやかしあやかしあやかし

あやかしあやかしあやかしあやかしあやかしあやかし

あやかしあやかしあやかしあやかしあやかしあやかし

あやかしあやかしあやかしあやかしあやかしあやかし

あやかしあやかしあやかしあやかしあやかしあやかし

あやかしあやかしあやかしあやかしあやかしあやかし

あやかしあやかしあやかしあやかしあやかしあやかし

あやかしあやかしあやかしあやかしあやかしあやかし

あやかしあやかしあやかしあやかしあやかしあやかし

法巴法眼を修養あるべき方の秘蔵に記されたる所は
多岐のほかにさうしてさうしてさうしてさうしてさうして
さうしてさうしてさうしてさうしてさうしてさうしてさうして
法巴法眼の説く事智月宮の衆の二つおれこ
一と自挿してハキ家の事おれと云ふ人の御やれ
の名指の記はさうしてさうしてさうしてさうしてさうして
これらも亦夫人の事指しはさうしてさうしてさうして
おもしろくと云ふ人の御やれさうしてさうしてさうして
さうしてさうしてさうしてさうしてさうしてさうしてさうして

是れむ 推のなもわりの本立
幻住席の記は信義小くさうして此文をさうしてさうして
賦小もさうして記小もさうしてさうしての文質の相違
ゆりさうしてさうしてさうしてさうしてさうしてさうして

是れこのむといえさうして推の本といえさうしてさうして
推りかとの付もさうしてさうして本の交極のさうしてさうして
さうしての令取体さうしてさうしての雲仙乃薪水のさうして
いさうしてさうして源三位彬政久さうして官位の御法
さうしてさうして推よさうしてさうして推はさうしてさうして
いとさうしてさうしてさうしてさうしてさうしてさうして
さうして

さうしてさうしてさうしてさうしてさうしてさうして

丘隅小止るさうしてさうしてさうしてさうしてさうしてさうして
おくさうしてさうしてさうしてさうしてさうしてさうしてさうして
さうしてさうしてさうしてさうしてさうしてさうしてさうして
さうしてさうしてさうしてさうしてさうしてさうしてさうして
さうしてさうしてさうしてさうしてさうしてさうしてさうして

へいふく玉堂雨宿ふ堂の子は古事なり 黄鵬し
子にあらし一教の深にたのむ

奥五

早苗おもい秋実まき日取り

今の白川よしのみちなるは早苗のよれ法く接地の
秋は日よやつき一也情しり教といふる
秋実のよきもや一田か川よるる
徳園法師の地流はかりか
こころをきりお

多雨深乃 雨や雨施り合歡の花

松島も多雨ふくく 多雨深に眠る
才一の母也ふくく造化の天工待せし事と終

そらふ一美人の愛らうとと 多雨深なる利小花
くくくく合歡の花は西施ふなとくく
海棠の雨は神を伝れくく合歡の本
小くくふされさるる人のくくあねくく多雨の地
糸はくくくくくくくくくくくく

その人れは雨ぬ花や朝の栗

かくの細るに何りく栗といふ文字は西の木
とくくく西の栗玉は嫁ありとくく行基菩薩も
そらふ枝り目ひまやとくく朝の字はくくく余
らくくくくくくくくくくくくくくくくく
くく

くくく死ぬなまらふもくくくくく

今日の人らて夏の勸をけりて一畑のお籠ち
夕アの白骨と傳へたるものひびく
りりしむるもの言ふもくくくくくくくく
一ふながさるるゆるゆるきききききき

志いさや思ふくく入畑の夢

寂寞なる山陰の谷の白布のやうれ日もと
清くもる清くもる神のしるしのくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくく
の畑ににのくくくくくくくくくくくく
感念とくくく

清くもる清くもる松葉

ゆり

清くもる高松の涼きやけくくくくくく

大井川はくくくくくくく

清くもる清くもるくくくくくく

この二句にありはるる病身のくくくく
園女う菊のきききくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくく

ゆりは清く

このはのきききききききききき
くくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく

あり

手書きの文は、世に於て、
け句二股切あり一―切かきし切歌なり一―
クアアリ一―切歌なり長歌歌文歌小
け一―切只瓜のまこと一―句は二句の法知し
句一―切文歌を突もいふ一―切瓜もいふ
阿れと文歌といふ一―切只瓜のまこと一―
細々乃御を移る者

有る故地への入りや居る文文涼

破れ口の入りや居る文文涼

二日月の宛は後の句に同様の句に法集よ
うゆ未考なり破れ口の方へ入るや居る文文涼

け句一―法の自らをうたぬるよ
あり一―うたぬる一―こと一―や
是よ一―うたぬる一―

貞室

這出よかいをうたぬる文文の文

此句を讀むる白選よまの部小くゆいさうまの句
小くゆいさうまの部小くゆいさうまの句
にのこ一―法をよまの部小くゆいさうまの句
か文一―まの部小くゆいさうまの句
をまの部小くゆいさうまの句
のち一―まの部小くゆいさうまの句
あり一―白尾花はよまの部小くゆいさうまの句

さびぬうれは高きものぞとらりしや
都小もおろかき旅の情もなれ
りしころし長途のほろけし
りしころし長途のほろけし

涼しき山に宿しし

道はよいかい登り下の首垂の夢

よゆくは心付ゆゑの夢

蚕飼もる人の古代のなめり 申良

源氏に交りし所の新橋の白く
や源氏に交りし所の新橋の白く
遠くまへとありまゝのちやい
近くまへとありまゝのちやい

舟はしるはは枝はなれり

瓢箪の屢いとしてきりやう
住家もかひせられぬ閑室の
の屋もくもくしるはは枝は
しるはは枝はなれり
しるはは枝はなれり
しるはは枝はなれり

さしと標や雨のせも早ま

手さしと標や雨のせも早ま
山麓のまゝよ一入るり
らららららららららららら

新古今

此句の字は流しにわかれは法わちらのまゝより
うたへし

友の字は流しにわかれは法の

此句は泊夏の句泊船集は秋の部に入ると
うたへし

宗祇は師のまゝ句

あし句は流しにわかれは法の
うたへし

わが秋は布衣の増え

この句はわが秋は布衣の増え
句選小なり此句は文屋康秀のまゝ
うたへし

わが秋は布衣の増え

先法乃流しにわかれは法の
うたへし

秋之部

七クワヤ秋とらしむる初めの夜

文目ふ入れて秋の夜ねれしも秋の夜はくしめち
七クワの夜よしゆなれと秋情なすたれしるあり
沼の石の流あかくしてしるふし清おもえん
法相云も風徒昨夜聲彌悲とらけあしこは秋乃
詞もなきふ夜一ねり考

さるも一星も揺る星の星のと

銀河雨中の吟しあささ編照小町うしる
しあしうらうく曾良もあぬうらう富照小町
幸ハ清家よゆり合さくたしの好し難のさ化
あしうらう富照小町は別口のあけうさけいえつく

を以てよ若の志ききむくくとや一
も家のか

あしうらうの夜よらうが
うしあふもらうやけり考

あしうらうの夜よらうの川

知者よくしり一里良あしうらうときびくしと夜をて
街の横よふの川流しうきくるを西入
き夜の流雪ふしうぬき一その夜の星
きしうらうの夜よらうの川
眼あよこゆらうし
うらうの夜よらうの川
うらうの夜よらうの川
うらうの夜よらうの川

名ふとくはるる信治ふしかばや情とあやうし
行くのみ

家々名杖々々小部友の首巻まつ

此句のしむきいろくは諸集小部く句解あり
とれ小えははささうらまき一記一人の志は
補ふ

白髪友の吟

くははるる

便しよ月の玉まつる武備より古里一
ゆふふ赤とせのころもさなふさ小窓の
草竹し霜うねる今ふきの枝らあうり
何もしむきしよまかりうらまき一記一人の志は
く眉志しよまきしよまきしよまきしよまき

とねしつひ切ると葉もあまにやうこの守は
はやまきと母の白髪友なりやよ浦島うまは
あひおれふはう眉もや老らると年月乃
あてりうらまきしよまきしよまき

一家こまはる白髪友の首巻まつ

まよしよやうかみなるふ

東花坊う況ゆへ本朝文操よ誠信のあらはと
わりやう結は原も此句のしむきいろくは諸集小部く句解あり
後御ふりしあまきしよまきしよまきしよまきしよまき
あまきしよまきしよまきしよまきしよまきしよまき
今かむしよまきしよまきしよまきしよまきしよまき
しよまきしよまきしよまきしよまきしよまき

胡蝶小もやうな能ある菜虫が

いふあれは造化のそとに生れしやう次や一生の草
むしとありと朽とくし後まうとよと聖賢も
蕨海柳の首陽ふ鶴死の衣衣とむ人
一生のてゝあはしとこのむしとまらまのま
しつらうのつらうのつらうは是れ非を
乃のつらうは馬よ喰れたり

さうつらうは馬よ喰れたり
わさひの馬破木とさう馬の毒まれとる中
とさうはけしとさう様れみらさう小
ふも喰れたりいふをさうふも人小も折

さうもさうはれ出る杭のさうはさうさうさう

さう破木のさう下學抄さうのさ
老のさうはわりとさうさうのさ

かおの尾のさう
さうさうはさうはさうはさうはさうはさうは
さうさうはさうはさうはさうはさうはさうは
さうさうはさうはさうはさうはさうはさうは
さうさうはさうはさうはさうはさうはさうは

雲歩禪
雨靡清の風の鳴し白氏あ集は林下幽閑氣味深
とさうさうはさうはさうはさうはさうはさうは
飲れ志しとさうさう柴室住のさうはさうは

りくろ回しめしおのるた

夕影や秋の部おのるの部おのる
夕影は秋の部おのるの部おのる
夕影は秋の部おのるの部おのる
夕影は秋の部おのるの部おのる
夕影は秋の部おのるの部おのる
夕影は秋の部おのるの部おのる
夕影は秋の部おのるの部おのる
夕影は秋の部おのるの部おのる
夕影は秋の部おのるの部おのる
夕影は秋の部おのるの部おのる

これ又けおのる夕影は秋の部おのるの部おのる
夕影は秋の部おのるの部おのる

月戸おのる夕影は秋の部おのるの部おのる
夕影は秋の部おのるの部おのる

橋川の傍部も夕影は秋の部おのるの部おのる
夕影は秋の部おのるの部おのる

初まおのる夕影は秋の部おのるの部おのる
夕影は秋の部おのるの部おのる
夕影は秋の部おのるの部おのる
夕影は秋の部おのるの部おのる
夕影は秋の部おのるの部おのる
夕影は秋の部おのるの部おのる
夕影は秋の部おのるの部おのる
夕影は秋の部おのるの部おのる
夕影は秋の部おのるの部おのる
夕影は秋の部おのるの部おのる

夕影は秋の部おのるの部おのる
夕影は秋の部おのるの部おのる

みる世入山の秋村はよみくささく夜并に
 あきよりしつゝのあふふ此方とはさくせりけ句は
 越え二二句やうりつゝ後女子の自賛して
 かの句にこの句にこそふとてや一かこも心は
 事もさおととにせしむとて一禮のや
 とはいしとてはいしぬう一種く小附金の
 就りりゝあゝさ清のうらとひさく深さたさ
 えぬゆりりけと淋一き揺蕩し断しより世の
 林下ふれとせめく衣ありとららとてせよさ
 揺蕩の羨望さふとて只揺はよめく事
 けぬ返情とまへ一
 神位の方一

古脚に衣并となりたる旅のさふもさつてさつむ
 かりの縁とよきかりのふりてとてさつり揺を
 けりゆゆも然りゆゆけりにつけせとら
 けりゆゆ事あり

足ふれあはゆゆの後の菊

徒然つゝ世のなりふりゆゆさるれまへに
 松林の志ほむふしゆゆはかまゆゆとて菊を
 甚乃ゆゆなるゆゆ福書の相伝るゆゆ
 聖賢小らゆゆ東鑑ゆゆとて南山八
 けりゆゆ野ふゆゆさゆゆ只ゆゆ菊の
 こゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 白菊乃目小まゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ



是ハききやう即堆ひあまひくの匂なる
空をたそひゆく水と云々菊の産地はう
むらしのいほし

ふたりの鏡のしづむちうは固くまゝに
たしとある河津の深くとまゝのるを

泉飛雨洗聲聞夢葉落風吹色相秋
少りゆゆしくまおひ有り有無の体の色あり
葉やしくらくまゝまらるるは流るる葉は深し
りりりりー流るるまらるる行又

後何れゆく人様も小枝の地へ
河も富士川のきさけりふにワ斗りては
ゆきれたふほりうはうかぬぬりくもくこまふ

ウケいあき
るりは叶

あふれいふまゝは流るる水のまじりては
いふわかれもさくさく

西行
雪折く人休る月久し

中つくと河のまゝのりや月なすこゝろ
このちかりやのまゝはすこゝろよおまよふは
るゆかれと流るる水はけりけりけりけり
くさくさくさくさくさくさくさくさく

新古今係三位抄
うやうやうやくやくやくやくやくやくやく
月と

秋も清く冷きと水鏡さうさう清きもの
 ねふまはくらくとさきさうさう白に照おこしるあそ人志の
 まくさくにけり白にけり一と田の傍さしむし
 とのちかひひくらさうも老ふむくさかくおのこ
 ひらうさうと取れすく一迷懐のつらう白丸
 うら傷の江にさかばく一と取破くさぬさしと宗灰の
 川さきさう一

月夜一松ののりさう砂のよ

越前敷かえの菊ののまきけりと人ののみらる
 さようさうと泥さの砂さうさうさうひくさ
 是うさう砂の沖さうさうさうさうさうさう
 桂下園のまき葉はさうさうさうさうさう
 さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

菊のまきやさうさう世の男さう

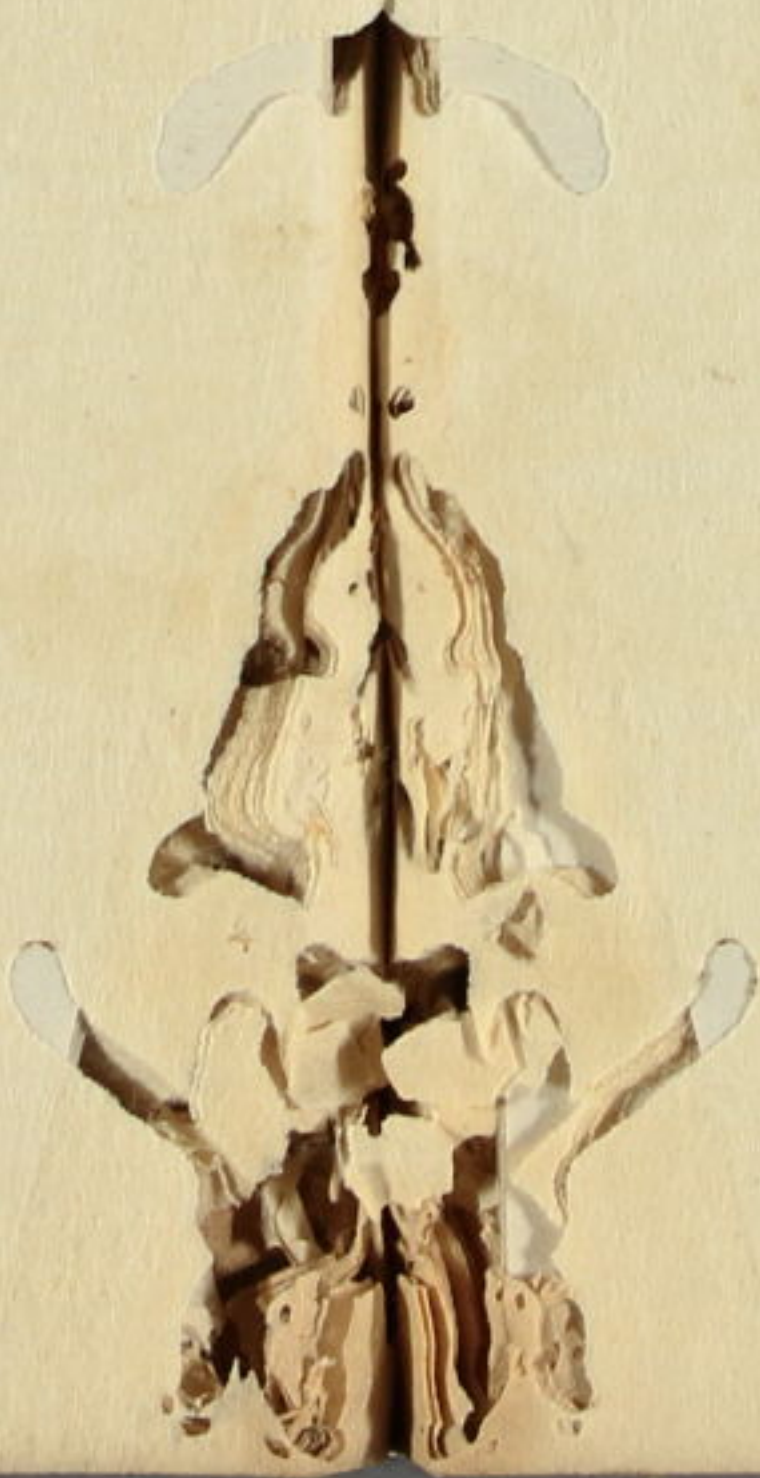
リセゆき

われにさうさうさうさうさうさうさう
 さうさうさうのまきさうさうさうさう
 リセゆきまきさうさうのまきさうさう
 菊のまきやさうさうはさうさう

さうさうのまきまきさうさうのまきさうさう
 さうさうさうさうさうさうさうさうさう
 さうさうさうさうさうさうさうさう
 さうさうさうさうさうさうさうさう
 さうさうさうさうさうさうさうさう

詞さ

リセのまきさうさうのまきさうさう



秋の心あきのこころ

美秋の心みあきのこころ

予或るきりしに美秋の字情秋の心よあるきりしにみあきのあじなつねあきのこころ
いふはあはれきりしに美秋の心いふはあはれきりしにみあきのこころ
いふはあはれきりしに美秋の心いふはあはれきりしにみあきのこころ
いふはあはれきりしに美秋の心いふはあはれきりしにみあきのこころ

白居易

朝踏花相伴出暮随飞鸟あさふみはなをともいでゆふをともひとりの

動もあやのあま泳をうごもあやのあまををり
すもあはれきりしに美秋の心すもあはれきりしにみあきのこころ
いふはあはれきりしに美秋の心いふはあはれきりしにみあきのこころ
いふはあはれきりしに美秋の心いふはあはれきりしにみあきのこころ

あはれきりしに美秋の心あはれきりしにみあきのこころ

あはれきりしに美秋の心あはれきりしにみあきのこころ

あはれきりしに美秋の心あはれきりしにみあきのこころ

この乃やけ人あこののやけひとあ

あはれきりしに美秋の心あはれきりしにみあきのこころ

いとあはれいとあはれ

あはれきりしに美秋の心あはれきりしにみあきのこころ

あはれきりしに美秋の心あはれきりしにみあきのこころ

蓮花初舞樂の山やけのいふもえつくもはあはれ
何しあはれはうらむもあはれはあはれはあはれはあはれ
その格とらふるもあはれはあはれはあはれはあはれ
はあはれはあはれはあはれはあはれはあはれはあはれ

いそゆき
いそゆき

いそゆき
いそゆき

いそゆき
いそゆき

いそゆき
いそゆき



惟高初舞の山やけのいふもえつくもはあはれ
何しあはれはうらむもあはれはあはれはあはれはあはれ
その格とらふるもあはれはあはれはあはれはあはれ
はあはれはあはれはあはれはあはれはあはれはあはれ

いそゆき
いそゆき

いそゆき
いそゆき

芭蕉發句評林終

芭蕉發句評林附録

四季發句

混雜

うぐいさややのふ句よ糸綿紙
折くくをと神湖の葉々梅の花
とえんつ小枝のせりる煙々
うぐいさの月夜己う四十
分別へ是は踏込紙子
と月あや焚くぬ煙々の小松系
谷川や流れてはゆる根の痛
何りうとこしうぐいさ

井棠
允文
臺簫
杉雨
五津
紀逸
杉雨
存良

石川のやとらうさやう堂のれ
 こすうてもまのねきよ柳のれ
 江のこしり雪のりりきさるの花
 入おのやき里とくれ初さう
 はのふ花月の所やゆき
 山とくくくくく菊の月秋の形
 う川波のゆすうさる首登る
 らとく麻よりふの月まの星の月
 初音や海の揺るる波の松
 連翹や田舎のふたのまふ
 赤い園よりまの色りり郭公
 空楊柳遠るふ子の早れ松

豊日
 繁樹
 杉雨
 冠紫
 采仲
 夏雨
 湖十
 蓼和
 琴水
 桃水
 敬之
 杉雨

田丁めやも母より隠れ富士の歌
 春もまの振る髪友の柳のれ
 梅の香小碎くくくや空の層雲
 秋のまをふくくれや赤い
 いつしを浮てと麻のよこれ
 舟の風より立波かきくれ
 先生の柳のまゆり碎にりり
 餘くの氣はとめく吸ふ
 舟りりりり星は見えぬ
 死梅や様も寺のくちりり
 梅の花青くくくは友えつけり
 じりりや草うりり草へ天れ川

田社
 年路
 午町
 左簾
 芝光
 杉雨
 奉五
 湖天
 雪齋
 丹忘

月影のうらみきうけく踊るは
 木火のうらみきうけく踊るは
 月の輝はまほしきゆて踊るは
 秋の野ふ人の何れもやま角力
 遠くもやまへぬ家の破りぬ
 氏より女の子の紋を印しぬ
 氏より女の子の紋を印しぬ

杉口
 鶏口
 瓜頂
 杉雨
 信鳥

五津
 木髪
 英阜
 曙光
 冠紫
 麦角

恋や子のあき内のものもより
 月雪の小白髪もよる松
 春柳や今こぼれ月のよもこね
 涼しや夕立の夜も小松系
 坂ニワ散れぬ難の雪舟舟
 かしく燈や火をたきて放生人
 湖雪やよふふとむと物小舟
 女院はほろや雪の爪木こり
 車舟はまほのあまのうらみの葉
 横子やの傘の下の誰う娘
 春飾りかきむさ紀のあまの風

杉谷
 煉紫
 翠雨
 胡丸
 茂松
 紀付
 杉鳥
 桐雨
 杉笠
 女
 瑛子松
 桂雨
 弓風

山本氏明之の吟は系巻不終しく不易
流波の作者より可しくなき也其の
外一り

紅葉や鱧も新塔の梅の花
夕紅少くも菊いづきや松の露

曙光
全

龍泉寺より詠く

垢離とりの様とむや流ゆき
酒小巴く敷くも暮も秋のあま
入おの寝とて後何うさうさ
うんこみよ向ふは秋のそ
ふさふさの如くぬ糖舟の舟の形
かき立てる赤口のやうや白牡丹

杉雨
琴水
鯨巴
蕉雨
紀竹
孤星

紫衣や一把りしげんしつれ雪
月影も猶や菊より孤民
苗代やむくも葉の葉いつれ果

全
杉雨
全

此集のうつくしき歌はこれ
人ま似や鳥の嘴小やいと花

全

凡雅のほろりなきは笑はれて
夕紅少くも菊いづきや松の露

全

死生者命何と云と云とけり
くれけりやきのよは味小はれふ

全

芭蕉後句評林附録終

追加

くくいふ... 江戸ありし... 鴨牛... 杉雨... 野條... 板雨... 全... 全...

湖丈

純宝

漁帆

英阜

杉雨

全

野條

板雨

全

全

寶曆八年

寅正月吉日

書肆

京堀川錦上

西村市郎右衛門

江戸本町三丁目

西村源六

